

揺れる思い 求めた2回目

5月13日午後6時。武田靖男さん(67)の自宅(千葉県浦安市)で、2回目の「人生会議」が始まろうとしていた。

人生会議は、ACP(アドバンス・ケア・プランニング)の愛称だ。人生の最終段階に受けたい医療やケアを、家族や支えてくれる人たちと話しあう。だが、靖男さんが求めたのは、そんな紋切り型の枠を超えた△何か△だった。

看護学校の教員などを経て、2017年春、妻で元看護師の厚子さん(67)と「浦安あおか介護タクシー」を始めた。利用者をスムーズに運べるよう、前日に必ず道を下見した。ガソリン代が倍になっても、地元の役に立ちたかった。

昨年7月、病院で突然、「肝硬変末期」と診断された。介護タクシーの継続は断念した。それは、無念で、

無念で、無念で……。

腹痛に耐えきれず、夜中に救急車で何度も病院へ。繰り返す入院。やがて杖が必要になった。血小板が減少し、歯茎からの出血も増えた。体力も気力も落ち、検査結果の数値にはかり心がとらわれる。

冬になり、不思議な夢を見た。厚子さんと、小さな工場が並ぶ町の狭い路地に

いる。「食欲の出る銀の食器、つくってませんか？」と、一軒一軒尋ねて回る。食器は見つからない。

今年2月、厚子さんの勧めで初の人生会議を開いた。最期は家で迎える。食事や排せつの介助はいらない。延命治療はしない。激痛を抑えられなければ救急車を呼ぶ——などの希望を述べた。自分のことは自分で決めたいと思った。

そして4月、大きな決断をした。病院通いをやめて、在宅医療に切り替えた。スタッフに恵まれ、痛みのコントロールもできて、大きな安心感を得た。

ふと、前回の人生会議で発した言葉に、

人生会議を前に、オンラインでつながった画面を見る武田靖男さん、厚子さん夫婦(千葉県浦安市)で——鈴木毅彦撮影

ばられていた自分を感じた。肝硬変末期でも、絶対に人生の末期ではない。もっと前を見て、幸せに生きるすべがあるのではないか。揺れている自分を理解してほしい、認めてほしい。

2回目の人生会議に誘うと、前回とほぼ同じ10人が集まってくれた。医師も初めて加わった。

新型コロナウイルスの感染拡大で国が緊急事態宣言を出し、大勢は集まらない。自宅の2階で、厚子さんと訪問看護師、ケアマネジャー、近所に住む民生委員が車座になった。残り5人——在宅医、市議会議員、友人2人はLINEを使って参加し、一人娘(45)は電話でつながった。

靖男さんは、うれしさと不安のなかにいた。

◇ 靖男さんが実現させた2回目の「人生会議」を描く。(このシリーズは全8回)



*過去記事は「ミミドクター」で



みんなの声を聞かせて

武田靖男さん(67)の2回目「人生会議」を前に、妻の厚子さん(67)は、夫の発病後の日々を思った。

肝硬変末期。要介護度2。その宣告で、生活は夫の介護一色になった。

昨年8月の退院時、病院の相談員の「自宅でおむつ交換できますか」という問いが、夫を傷つけた。現実の受容を迫られても、夫は理解が追いつかない。「迷惑をかけてしまう。僕が入れる施設はないか」と、寂しそくに言った。

夜、腹痛が始まると、救

急車を呼ぶかどうかで緊張が走る。厚子さんも糖尿病や膝関節の病気などを抱えるが、緊急時に備え、服のまま眠ることが増えた。

せつかくつくった食事を「食べる」「食べない」で、悲しいけんかをする。夫のつらさを一人で受け止めたと思いつつ、「私の人生もかかっている。頑張つてよ、ちゃんと生きてよ」と求めてしまう。この危ういバランスが、いつまで持つというのか。

厚子さんの支えは、夫婦それぞれに始めたブログ



昨年7月、夫婦で行った東京・浅草寺のほおずき市。すぐ後に、武田靖男さん(右)の肝硬変が分かった(武田さん提供)

と、飼い猫のゴロウとチィ。そして、自主勉強会「(千葉県)浦安地域を見つめ合う会」のメンバーら友人たちの存在だった。

夫の「人生会議」を開きたいと思いつき、友人宛てに、「力を貸してください！」と手紙を出した。みんなの声をきかせてほしい。手紙は、厚子さんの「SO S」そのものだった。

今年2月に開いた人生会議で、夫の病状は共有され、最期に受けた医療やケアの内容を語ることができた。離れて暮らす一人娘(45)も「必要な時は入院して」「お母さんには迷惑をかけないで」と、素直な意見を言ってくれた。

ただし、いずれ、どこからが延命治療か、緩和ケアとの違いは何かの解釈をハッキリさせなければならぬ時期が来る——という「宿題」が残された。

4月、療養を在宅医療に切り替えたことで、生活は次のステップに進んだ。治す医療を追求せず、家で幸せな暮らしを求めていく。

しかし、それは、迫り来る「死」をより強く意識することでもある。

死ぬことを待つだけの日常から、飛び出したい。この状況を、突破したい。私一人ではできない。多くの人のつながりが必要だと、厚子さんは改めて思った。

どうしても2回目の人生会議を開きたい。もう一度みんなの声を聞き、何でもいいたく夫婦が生きる可能性にふれてみたい。

4月末、参加メンバーから助言を得て、パソコンショップに駆け込んだ。LINEの設定を変え、大勢の顔を画面に映しながら話ができる設定にした。機械音痴の厚子さんには、奇跡のような出来事だった。



*過去記事は「ミニドクター」で

医師から「うれしい言葉」

肝硬変末期の武田靖男さん(67)の自宅2階(千葉県浦安市)で、2回目の「人生会議」が始まった。

冒頭、靖男さんは、心境の変化を口にした。

昨年7月に最初の入院をして以来、最期の医療やケアのことは自分で決めたいと思っていた。病院の医師に「悪くなるだけ」と言われていたし、誰にも負担をかけたくない。2月の人生会議では、延命治療や排せつの介助はいららないなどの希望を伝えた。

けれど、人は一人では生きられないようだ。今年4月、在宅医療に切り替えてから、「自分の人生はみんなの人生でもあるのか」と考えるようになった。

「決めてしまったということではなく、ドクターとか訪問看護師さん、ケアマネジャーさんと相談しながら考えたい。自分一人で(意

思を)決めるのが人生会議じゃない、と思うようになって……」。穏やかな口調で靖男さんが言った。

当然、病状や残された時間のめどを共有することが、より重要になる。

妻の厚子さん(67)が突然、切り出した。「先生！夫は違うって言うんですけど、末期ですよね」



「ひまわりクリニック」院長の山田智子さん(48)が応じた。山田さんはスマートフォンを使って参加していた。

肝硬変には、A(軽症)、B(中等症)、C(重症)の3段階がある。「靖男さんは、Bに近いCです」。末期という言葉は使わなかった。1か月間のやりとりで、靖男さんの病状がこれまで末期のひと言で片づけられ、夫婦を追い込んできたことに気づいていたからだ。思いつめるにはまだ早いことを、正確に伝えたいと思った。

「なんて優しいんですよ」。厚子さんがうめくように言葉を吐き、尋ねた。「じゃ、まじめに生活すれ

ば、もうちょっと人生を楽しめるってことですか」
「そう思っています」
その瞬間、厚子さんのなかに強い感情が込みあげた。やれる！ まだやれる！ もっともっと出かけることだってできる！

10人が参加する人生会議の空気が変わった。みんなが、安堵と喜びをわかちあった。山田さんが、「肝臓の病気も長くつきあっていたから、お教えできた」とつけ加える。今度は、なるほど、という空気が広がった。

靖男さんは、眼鏡がずり落ちて指さすのを指摘され、「おーっ」と声をあげて慌てて直した。Bに近いC……。重いとはいえ、うれしい言葉だ。肝硬変とうまくつきあうコツをすぐにも知りたかったが、「小出しに聞いて、ちょっとずつ幸せになっていこう」と思い直した。

武田靖男さん(左から2人目)、厚子さん(左端)夫婦と、人生会議の参加者たち(5月13日、鈴木毅彦撮影)



*過去記事はヨミドクターで

弱さにふれ深くつながる

強いなあ。この夫婦は強いんだなあ。

武田靖男さん(67)の自宅(千葉県浦安市)で開かれた2回目の「人生会議」に出席し、民生委員の大西みち子さん(67)は、うなづきました。

地域の世話役として、230世帯を担当している。新型コロナウイルスの流行で緊急事態宣言が出され、独居の高齢者たち40人の安否確認は電話やメールでするようになった。この日もLINEで参加するつもりが、うまくつながらず、靖男さん宅に駆けつけた。肝硬変末期でも、靖男さんは病気を理解し、夫婦で自分たちのことを発信し、この場に人を集めている。

「強いですねえ」と繰り返し、靖男さんの妻の厚子さん(67)が、「みなさんが支えてくれるから」と、声を絞り出した。靖男さん

はほほえみながら、内心、「僕、強くないよ。だいたい、人生会議って、自分の弱さをさらけ出す場所じゃないか」と思っていた。

ほとんど同じメンバーなのに、今年2月、最期の過ぎ方について靖男さんの心づもりを聞いた前回とは随分と違う空気が。靖男さんの話の後、楽しく、みんなの対話が続いていく。手が届かないと思っていた互いのこころにふれている、そんな感じがした。

靖男さん夫婦や参加者たちの言葉が、「あなたはどう生きるのか」と問いかけてくるように、大西さんは、気がつく、夢中で自分のことを話していた。

オンラインで参加者をつないだ人生会議。中央が、民生委員の大西さん(5月13日、鈴木毅彦撮影)



私も、最期の時のふるまいは自分で決めたい。でも、私たち夫婦に、死と向きあうこんな強さが持てるだろうか。実は、5年前、姉(享年65歳)を胆管がんで亡くした。最期まで周囲への配慮を欠かさず、いのちの灯を燃やし尽くすように生きた……。言葉がとりとめもなくあふれ出した。

大西さんは、参加者たち

の心遣いにも感心した。夫婦2人で病氣と闘うのは不安だし、怖い。考えが変わるのも当たり前のこと。その前提を分かちあったうえで、自分に何ができるかと悩んでいる。靖男さんが生きることに関わるとは、一緒に悩むことだということかのように。

なぜ、みんな、こんなに優しいのだろうか？

あっと、ひらめいた。みんなが心の奥に、傷ついた体験や弱さを抱えているのではないか。その弱さが靖男さん夫婦の見せてくれる弱さに共振りし、今、深くつながって、対話が進んでいるのではないか。

靖男さん夫婦を見て、強いなあと感じた。でも、それは、弱さを力にできるから強いのだ――。

人は弱くあつていい。そう気づいた時、大西さんは、独居の高齢者たちの姿を思い浮かべた。



*過去記事はヨミドクターで